

パキスタンのアフガニスタン難民（フォト・エッセイ）

著者	今岡 昌子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	144
ページ	39-42
発行年	2007-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005171



■ フォト・エッセイ ■

パキスタンの アフガニスタン難民

写真・文
今岡昌子
Masako Imaoka

北西辺境州サワビ近くにある「カンダハリ」というアフガニスタン難民たちの小学校

一見するとアリの巣にも似た迷路のようだ。泥壁造りのマツチ箱型平屋が、身長よりもやや高い扉に囲まれて、神秘のベールに覆われるように軒を連ねている。

ここはパキスタンの首都イスラマバードとその隣町ラワルピンディとの境界付近にある「アフガニスタン難民キャンプ」。一昨年前、パキスタン政府により取り壊されて以来、大部分が空き地と化したのが、残された家屋に居残り組の難民家族が今もひっそりと暮らしている。

すぐ脇の幹線道からそのキャンプ内へ向かうと、こちらを振り返る子供たちが一斉に大声で叫んだ。「ハロー外国人!」。五人以上の少年たちが全エネルギーをこちらへ注ぐように、束になって駆け寄ってくる。悪戯っ子の関心はまず私の肩にかかっているカメラだ。触ってみる引き寄せてみる、挙げ句の果てにはシャツを押ししてみよう、フタを空けてみよう、と。日頃、小学校へ通えない少年たちの好奇心は強すぎるほどだ。「カメラはオモチャではないよ」と、私は少年たちに注意を促したが、家父長制社会のせいか影響力は全くないに等しい。目前を通りかかったアフガニスタン人の年配男性から頭をコツンと叩かれて、少年たちは、一瞬だけ落ち着くのだった…。

約三〇年前、旧ソ連のアフガニスタン侵攻で、当時紛争に巻き込まれた人々が難民となって国外へと脱出。以来、アフガニスタンは内紛を繰り返し、二〇〇一年一〇月



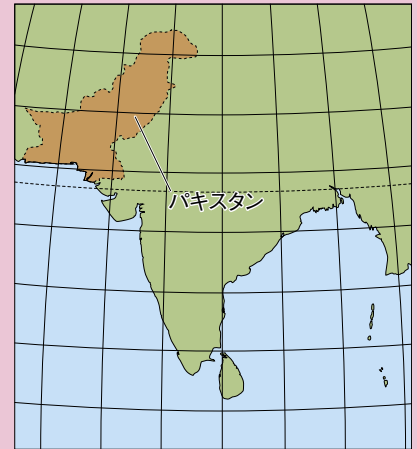
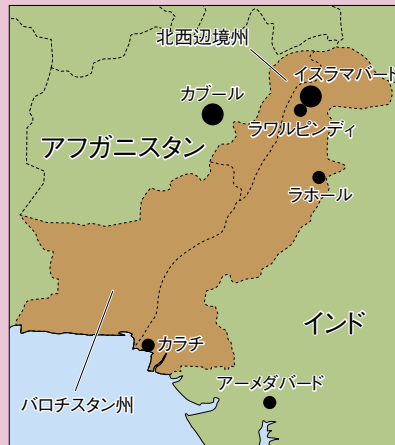
アフガニスタンへ帰還する直前のハザラ人家族



イスラマバード近郊にある難民キャンプで遊ぶ子供たち。一番奥の建物はパキスタンの一般的な住宅街



泥をこねる作業は重労働。素焼きレンガづくりから得られる収入は少ない



の連合軍によるアフガニスタン攻撃によって、アフガニスタン人の国外退去のピークを迎えた。

二〇〇二年以降、隣国パキスタンより約三〇〇万人のアフガニスタン難民が帰還したが、パキスタンに未だに二一五万人以上住んでいることは意外と知られていない。その過半数以上は都市部に住んでおり、定着化した人もいる。

「二〇年前にアフガニスタンからやってきました。私たちの家はここパキスタンです。アフガニスタンに戻ってビジネスも含めてゼロから再スタートを切るのは難しいです」。

イスラマバードで宝石商を営む四〇代の男性は、苦虫を噛み潰したように語った。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が行った難民調査によると、およそ八四％のアフガニスタン難民が、本国アフガニスタンへの帰還に不安を抱えているという。具体的にはアフガニスタンでの治安、土地や住まい、生計など。本国へ戻りたくないとの理由から、難民登録を済ませていない人々も少なくはないという。最近ではタリバン勢力の復活が徐々に全土に広まっており、対タリバン政策に関するカルザイ政権の動向もまた難民の帰還を左右する大きなファクターである。

一方、難民にとってパキスタンでの暮らしが良いかというと、必ずしもそうではない側面もある。特に、紛争などの影響



荷物運搬人はバザールを縦横無尽に歩く



難民キャンプ近隣の農場で雇用される難民



絨毯を織るハザラ人難民



も含めて極度にインフラが整っていない環境で過ごしてきた人々、あるいは学校教育を受けていない人々など、低賃金の労働者として過酷な肉体的労働を強いられている人をいたる所で多数見かけた。

イスラマバード郊外の難民が多数住んでいるタライ地区にて、パキスタン在住二〇年のアフガニスタン人男性カジさん（六五歳）は、素焼きレンガ造りのため、満身の力をこめてカマを振り上げ、泥をこねていた。

「この仕事をもう二〇年続けています。ブロック一〇〇〇個完成させると報酬は二九〇ルピー（約六〇〇円）です。雇用者側はそのブロック一〇〇〇個を二〇〇〇ルピーで販売しているので、もう少し報酬を上げてもらえないかと交渉しましたが、『文句があるなら昨年と前月の報酬を返してくれ！』といわれました。もうそれ以上は何もいえませんでした。」

アフガニスタンで繰り返されてきた紛争に巻き込まれ、平穏を求めて流れてきた難民の苦労は今も続いている。レンガ職人のほか、農場作業員や食材売り、荷物運搬人、絨毯織りなどを、街や郊外で見かける。

貧困からなかなか脱せぬ状況下、アフガニスタン難民キャンプの一部が近年、過激派の温床になっていることが指摘されている。パキスタン政府は、治安上の理由でキャンプの閉鎖を決定するべきだと主張し、昨年、UNHCRおよびアフガニスタンと



アフガニスタンの主食、ナンを焼いて売っている



鮮やかな色彩の小物が土色の町に映える



パシュトゥン人の花嫁衣裳。式は盛大に行われる

の間で、難民に関する三者協議を行った。その結果、キャンプ四カ所（北西辺境州二カ所とバロチスタン州二カ所）の閉鎖が決定し、既に二カ所で難民の退去がほぼ完了した。

では難民たちはどこへ行くのか、と思うのだが、パキスタン政府は二つのオプションを用意した。ひとつは、アフガニスタンへ帰還したい人にはUNHCRによる支援プログラムを利用できる措置。もうひとつは、帰還したくない人に対してパキスタン政府指定の別のキャンプに移動する措置だ。既に閉鎖された、イスラマバードとその隣町ラウルピンディとの境界付近にあるキャンプに暮らし続ける男性に、アフガニスタン人難民が尋ねると「パキスタン人です」と答えたように、閉鎖を目前にしたバロチスタン州のキャンプ内にも「我々はアフガニスタン人ではありません」と主張し、抵抗運動を行っている難民たちがいる。この地域は五月に一時治安が悪化して立ち入れなくなったが、それ以降は平穏に帰還または移住の準備が進められている。

結局、今年は春までにパキスタンから約二五万人のアフガニスタン難民が帰還したという。昨年度の同時期と比べて三倍増加した。帰還への圧力がアフガニスタン難民に重くのしかかっていることの表れである。

（いまおか まさこ）／フォトグラファ